



1960年代後半、ラジオのレギュラー番組を10本ほど持つようになり、海外取材に飛び回っていました。アメリカでは「花のサンフランシスコ」が大ヒットして、自然回帰と人間性が盛り上がっていました。▲69年8月、米ニューヨーク州で開かれたロック中心の野外コンサート「ウッドストック・フェスティバル」は、愛と平和を求めるヒッピー時代の象徴だった▼ベトナム戦争を巡る反戦運動は日本にも飛び火し、音楽の世界にも変化が表れました。「反体制ロックでなければ音楽にあらず」と

## 音楽は愛 湯川 れい子 14



1967年、ヒッピー文化を代表するバンド「グレイトフル・フォー・シックス」のメンバーとして、米国に出演した湯川さん（提供）

## 「引退」エルビス復活で撤回

いった風潮が広がり、音楽評論も理論武装に終始して窮屈な内容になっていきました。ロック集会と呼ばれて、「エルビス・プレスリー」という存在があったから、ロックンロールはここまで爆発できた」と発言すると、「エルビスがロックだなんて冗談じゃない」と、糾弾されました。

日本のロックはビートルズから始まっていたので、ビートルズがいかにエルビスの影響を受けたかなど、それ以前の歴史を全然知らないんですね。私が心から聴きたい楽曲について語れないのであれば、音楽を伝える喜びも感じられなくなりました。

21歳の時に形だけの結婚をした相手との離婚が成立し、30歳を過ぎた頃です。結婚願望はなかったけれど、なぜか子供だけは欲しかった。明け方まで原稿を書き、疲れ果ててベッドにもぐり込む生活で一生が終わると思うと、虚しくなりました。それで69年、ラジオ

も雑誌連載もすべてやめる決意をします。「さようなら湯川れい子さん」という、聴取者約5000人が参加したラジオの公開録音番組で、引退宣言をするんです。

時間ができたので、思い切った長兄の遺骨を捜しに出かけました。いつか詣でようと温めていた旅です。手がかりは、戦時中の情報統制で墨塗りにされた兄から一枚のハガキ。ルソン島北部のサブランで、当時の日本兵を知る現地の人から話を聞くことができました。遺骨は見つかりませんでした。恐らく兄が身を潜めていたであろう洞窟を捜し出し、お線香やタバコを供えました。

帰国してしばらく、自宅で一人鬱々として暮らしていましたが、ある時、状況が一変します。大好きなエルビス・プレスリーが、長期の映画契約の拘束を解かれ、アメリカでコンサート活動を再開したとのニュースが伝わってきたのです。70年、ラスベガスに専用ライブスペースができ、そこでの記録映像は映画「エルビス・オン・ステージ」にまとめられ、71年に日本でも大ヒットしました。

（編集委員 永峰好美）



ラジオのFEN(極東向け駐留米軍放送網)で初めてエルビス・プレスリーの「ハートブレイク・ホテル」を聴いて夢中になったのは、1956年、20歳の時。それから15年後の71年、エルビスに会いたいという夢が、ラスベガスでようやくかないました。

アルバム「エルビス・オン・ステージ」は日本でも爆発的にヒットしましたが、日本のRCAレクターが、100万枚売り上げ記念のゴールド・ディスクを贈呈する機会をつくり、音楽評論家の福田一郎さんを団長に、業界関係者約20人のラスベガス・コンサート鑑賞

## 音楽は愛 湯川 れい子 15

### 夢の対面 石鹼の匂い

ツアー団が結成されたのです。

それまで取材でアメリカを訪れるたびに、ハリウッドで映画撮影中のエルビスにインタビューを申し込んできました。父親のバーノン・プレスリーさんから電話で「もう少し待って」という連絡をもらい、無理してビバリー・ウィルシャー・ホテルに宿泊して1週間待機したことも。でもマネジャーのトム・パークーさんからOKが出ず、空振りに終わっていたのです。

ラスベガスのインターナショナル・ホテルでのショーの前、楽屋訪問が4人に許され、私はその1人選ばれました。楽屋に現れたエルビスは想像していたほどの背の高さを感じさせ

ず、石鹼の匂いがして、透明感と、牧師さんのような禁欲的な清潔感のある人という印象でした。

私の質問に「ステージは楽しい。動いているのが好きなんだ」と、日本にはぜひ行きたい。武術に尊敬の念を持っている。講道館に「関心がある」など、優しく笑みを浮かべながら、低い声で答えてくれました。写真撮影では、緊張していたせいかシャッターがなかなか下りなくて、「日本製のカメラもダメだねえ」とジョークを飛ばして和ませてくれました。

▲プレスリーは、終生アメリカ、カナダ以外でコンサートを行っていない▼

サートをやっている。ゴールド・ディスクを贈呈すると、エルビスからは、ヒット曲にちなんで製作されたティベアをプレゼントされ、軽くお別れのキスをしてくれました。

そして、ステージ。ふわりと不死鳥のように登場すると、1時間半、歌い続け、動き続け、冗談を言って盛り上げて、ファンにキスの



「エルビスには3回会ったけれど、いつも美しかった」と湯川さん(1973年のラスベガスのショーの楽屋で、湯川さん提供)

サーピスをして回る……。久しぶりのステージ復活で、本当に生き生きとエネルギーッシュで、どこから見ても美しく、まさに千両役者でした。

「ああ、本物のエルビスが歌っている」と思ったとたん、大粒の涙がこぼれお化粧がはげ落ちてぐしゃぐしゃになるほど泣いてしまいました。ハンカチでは間に合わず、紙ナプキンで涙をふいたり鼻をかんだりしていたら、同行のシンガー・ソングライターの本山コウタローさんが、「れい子さん、これも使って」と、隣のテーブルから大きなクロスをはずして来て、からかうんです。もう、頭にきちゃいました。

思い続けて15年の私の感動を邪魔しないでという気分でした。今でもあの時を思い返すと、胸が熱くなります。

(編集委員 永峰好美)